

日本の絶滅危惧維管束植物に対する絶滅リスク評価再考～レッドリスト掲載基準に関して～

○ 宗田一男（横浜国大）・松田裕之（横浜国大）・藤田卓（九州大）・矢原徹一（九州大）

世界的に野生絶滅危惧種への関心が高まって以来、それらをリスト化（レッドリスト）し著作物（レッドデータブック、以下 RDB）として出版する動きが盛んである。日本では、維管束植物について 1989 年と 2000 年に RDB が出版された。2000 年版の RDB では、より定量的な評価手法を目指し、絶滅リスクによる判定を積極的に利用している。

絶滅リスク算出のためにはメッシュ（区域）ごとの現存個体数と減少率が必要である。それらは調査票を用い、約 400 名の調査員の尽力によって、環境省 2 次メッシュ（約 100km²）単位で、約 2000 分類群に関して得ることができた。それらのデータを用いて、2000 年版 RDB では、絶滅リスクを現存個体数に独立な「種依存型」減少率分布を採用し、モンテカルロシミュレーションによって算出した。

本研究は、2000 年版の絶滅リスク評価手法を踏まえ、現在改訂中の維管束植物 RDB に掲載する種を判定するための、新たなリスク評価算出手法を提案することを目的とする。絶滅リスクを算出する場合、シミュレーションに用いる減少率をどのように定めるかが大切である。本研究では「地域依存型」減少率分布を採用して絶滅リスクを算出した。「地域依存型」による手法とは、ある種のあるメッシュにおける次の 10 年の減少率を、そのメッシュに存在する全種の減少率分布に従って選ぶ手法である。今回の発表では、2 つの減少率分布を用いた絶滅リスクを比較検討し考察した結果を報告する。